

# 保育者養成課程の大学生による スポーツボランティア経験の意味づけ

— 社会人基礎力と保育実践力の向上への寄与 —

大塚 紫乃\*・守屋 志保\*\*・蛭原 正貴\*\*\*・村上 涼\*\*\*\*

## 1. 問題

2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックを中心として、日本における国際大会の開催がスポーツボランティアの認知度を高めていることは間違いない。しかしながら、日本国内におけるスポーツボランティアの歴史は浅く、研究的な立場における知見の蓄積はまだ始まったばかりと言える。

そもそも、スポーツボランティアは武隈(1997)によって「個人の自律的な決定と選択に基づく、公益性、非営利性を前提としたスポーツに関わる社会的活動、およびその行為主体」と概念が規定されたことを皮切りに、その行動原理の解明を中心に研究が行われてきた。その後、様々な視点による研究が展開されていき、山下・行實(2015)は蓄積された知見を「理論・実態」「参加行動」「意識変容」「継続行動」「その他」の5つの研究カテゴリーに区分して整理している。なかでも、「意識変容」に関しては、「するスポーツ」から「支えるスポーツ」への視点の移行を経験することは、豊かなスポーツ生活の形成に重要な役割を

果たすと述べている。

スポーツボランティアにおける意識変容については、近年盛んに研究が行われており(豊田・金森, 2005; 山下・行實, 2015; 元嶋ら, 2016)、スポーツボランティアへの参加意思や継続意思の変容に焦点が当てられている。さらに、意識変容の検討はアダプテッドスポーツにも拡大しており、アダプテッドスポーツそのものに対するイメージの変容はもちろんのこと、アダプテッドスポーツに参加している知的障害者に対する意識にも変容が見られたことが報告されている(山田, 2007; 藤田, 2015)。このように、近年のスポーツボランティアに関する研究は、より体験の意味に焦点が当てられるようになっており、その価値を可視化し、高めるための方策について議論されることが多くなっている。

スポーツボランティアに参加する価値を可視化するために用いられる指標として、社会人基礎力が挙げられる。社会人基礎力とは、経済産業省が2006年に提唱した概念であり、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされている。具体的には、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」という3つの能力(12の能力要素)で構成されており、社会人に必要な基礎的な力を数値として測定することが可能となっている。この社会人基礎力を活用し、山下・行實(2016)は、日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)所属のクラブにおいてボランティア活動を行ったところ、参加者の「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「状況把握力」、「規律性」の8要

2023年11月30日受付

\* 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科准教授  
発達心理学, 教育心理学

\*\* 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科教授  
スポーツ科学, スポーツ心理学

\*\*\* 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科講師  
体育, 身体教育学

\*\*\*\* 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科准教授  
臨床発達心理学, 保育心理学

素において有意な向上が見られたことを報告している。また、音成（2016）はプロバスケットボールクラブ、なぎなた、障害者スポーツなどへのボランティアに参加したことで、参加者の「主体性」、「働きかけ力」、「発信力」、「傾聴力」、「状況把握力」の5要素において有意な差が見られたことを報告している。このように、スポーツボランティアへの参加が社会人基礎力を高めることが示唆されており、体験の価値に新たな意味づけがなされるようになっている。

スポーツボランティアの価値に対する新たな意味付けとして、守屋ら（2023）は保育者養成校に所属する学生がスポーツボランティアに参加することで、保育者に必要な素養を高めるとともに、子どものスポーツ体験を支えるためのスポーツ理解が深められる可能性を示唆している。一方で、音成（2021）は保育者養成校に所属する学生は保育者となる自己意識・職能意識の形成とともに、保育者としてのパフォーマンスの向上も図らなければならないと指摘しており、スポーツボランティアへの参加だけでは、現場で必要とされる教育・保育の技術や技能といった保育実践力の向上には不十分であると述べている。保育者養成校に所属する学生がボランティアに参加することは珍しいことではなく、これまで、ボランティアに参加することで職能形成や意識の変容、社会人基礎力を高めることなど、様々な体験の価値が報告されている（新谷，2017；多田・高松，2019；音成，2021；中村，2023）。しかしながら、スポーツボランティアに焦点を当てた場合、スポーツボランティアへの参加が保育者養成校に所属する学生に与える影響について、具体的な指標を用いて検討を行った研究は見当たらない。そこで、本研究では先述した社会人基礎力を活用し、保育者養成校に所属する学生がスポーツボランティアに参加することで、社会人基礎力にどのような変化を及ぼすのかということを検討する。また、社会人基礎力の測定と質的インタビューの実施から、先述した音成（2021）が指摘する課題を解決すべく、スポーツボランティアへの参加が保育実践力にどのように寄与するのかということについても

併せて検討する。

## 2. 方法

### 2.1 対象者

スポーツボランティアに参加した大学生12名であった。

### 2.2 イベント概要

#### • exPANDA 2023（表1）

2023年5月3日から5日にかけて静岡県富士市にある総合型スポーツ施設エスプラット・フジスパークにて小学校2年生から5年生を対象にマルチスポーツイベントが開催された。『exPANDA』とは、「expand」= 拡大する・膨張させる・発展させる、「A」= スタート・1つの・はじまる、を

表1 イベント概要「exPANDA 2023」

2023/5/3 (1日目)		2023/5/4 (2日目)		2023/5/5 (3日目)	
時間	内容	時間	内容	時間	内容
12:00	オープニング セレモニー	7:00- 8:00	起床	7:00- 8:00	起床
13:00- 17:00	スポーツ	8:00- 9:00	準備	8:00- 9:00	準備
		9:00- 10:00	移動	9:00- 10:00	イベント
		10:00- 12:00	スポーツ	10:00- 12:00	スポーツ
		12:00- 13:00	昼食	12:00- 13:00	クロージング
		13:00- 14:00	休憩	13:00	解散
18:00- 19:00	入浴	14:00- 16:00	スポーツ	15:00	スタッフ 解散
19:00- 20:00	夕食	16:00- 17:00	レクリ エーション		
21:00	就寝	17:00- 18:00	移動		
22:00	スタッフ ミーティング	18:00- 19:00	入浴		
		19:00- 20:00	夕食		
		21:00	就寝		
		22:00	スタッフ ミーティング		

組み合わせた造語で、子どもたちを中心とした可能性を信じ、関わる全ての人々で可能性を拡大できる場を創出していくイベントとして発足した。ミッションに掲げられたのが、1.可能性を広げる、2.早期専門性からの脱却、3.花を咲かせるための経験をという3つである。ボランティアスタッフの主な勤務内容は、グループ分けされた参加者の行動管理、各スポーツのアシスタントであった。

### 2.3 手続き

ボランティア学生に、事前に説明会を行い、調査参加への同意を得た。その際、研究結果の倫理的配慮についての文書を配布した。なお、本研究は江戸川大学「人を対象とする研究」倫理審査を受けた（審査番号：R05-001A）。

ボランティア後に、個別インタビューを行った。1対1の面接形式で、研究者4名がインタビューを担当した。体験を具体的に振り返るとともに、ボランティアについての自己評価を尋ねるようにした。自己評価の観点は、①子どもとの関わり、②自己表現、③勤務態度、④チームワークの理解であった。4つの観点は、守屋ら（2023）と同様であった。保育実習や教育実習（幼稚園）での評価を参照した。実習を通して身につけたい力が、ボランティアで育っているか考察するためであった。

また、インタビューの最後に、今回の経験を保育に活かすことができるかという質問を追加した。

ボランティア前後の社会人基礎力（山下・行實、2016）の変化を調べるために、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「状況把握力」、「規律性」の8領域からなる36の質問項目について、GoogleのFormsを用いて、対象者から回答を得た（質問内容は資料を参照）。それぞれの項目について、現在の自分自身がどれだけ当てはまると思うか尋ね、ボランティア開始前と終了後の2回調査を行った。

## 2.4 分析方法

### (1) 学生の語りの分析方法

分析は、下記の手順で行った。①各学生のインタビューの逐語録を作成し、②そのインタビューの逐語録を、KJ法（川喜田、1970）を参考にして、データの類似性や共通性をもとにカテゴリー化をした。すなわち、インタビュー逐語録を、意味単位で切片化して、それぞれの切片に概念を付与した。

### (2) 社会人基礎力の分析方法

4件法の回答を得点化し、8つの領域ごとの合計点を算出した。各領域3つの質問が含まれるため、領域ごとの合計点は最大12点であった。参加者内の事前と事後の領域ごとの得点変化を分析した。その際、統計分析にはSPSS ver.27を用い、対応のある $t$ 検定を行った。

## 3. 結果

### 3.1 学生の自己評価

#### (1) 子どもとの関わり

守屋ら（2023）では、①子ども理解、②子ども同士の関わり、③介入方法の模索、④集団行動の制御、⑤人や環境への馴化、⑥印象の変化、⑦抽象的な好きから具体的な好きに変化、⑧感情の表出、⑨信頼関係の構築、⑩不安の消失、⑪気持ちの受容、⑫指導に対する葛藤、⑬視野に関する課題、⑭喜びの認識、⑮指導法に関する学び、⑯安全に対する意識、の16の内容が語られた。

今回、前回と共通する内容として、①子ども理解は6名、②子ども同士の関わりは3名、③介入方法の模索は8名、④集団行動の制御は3名、⑤人や環境への馴化は1名、⑥印象の変化は3名が語りに含めていた。前回と異なる内容として、⑦保育技術の実践は3名、⑧子どもの観察は3名、⑨子どもへの指示は1名、⑩責任感の自覚は1名、⑪関わりに対する反省は1名、⑫コミュニケーション技術の習得は1名が語っていた。

ボランティアに参加した学生は、〈子ども同士

の関わり」を観察しながら、一人ひとり異なるという〈子ども理解〉につなげることができた。〈子どもの観察〉の重要性に気づいた者もいた。実際に子どもと関わることで〈介入方法の模索〉が起こり、〈集団行動の制御〉や〈子どもへの指示〉の具体的方法についても学ぶ機会となった。これまで学んだ〈保育技術の実践〉を行い、学びを現場で活かす機会ともなったことが窺える。中には、〈関わりに対する反省〉をし、改善しようとする向上心が芽生えたり、〈責任感の自覚〉をし、子どもと関わる際の基礎的態度を理解したりする者もいた。3日間という期間の中で〈人や環境への馴化〉が進み、子どもへの〈印象の変化〉も起こった。人と関わる体験によって〈コミュニケーション技術の習得〉にも結びついた。

表2 振り返り視点「子どもとの関わり」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語りの一部
	①子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>個性も能力も違って、ポジティブな子もいれば、少しネガティブな子もいたりして、やっぱり全員違うんだなって思っ。</li> <li>子どもの中には、疲れたり、やりたくないスポーツがあると後ろで座っていたりすることがあって、人によって体力差がある。</li> </ul>
	②子ども同士の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>高学年のお兄さんお姉さんがいる分、助け合いと言いますか、協力し合う姿が見られました。</li> <li>打ち解けていく様子を見られた。</li> </ul>
	③介入方法模索	<ul style="list-style-type: none"> <li>騒いじゃう子には次はこうしようねっていう風に言ったりとか、次の目標を明確化してあげると上手くいくのかなって思いました。</li> <li>注目を集められるように動きとか大きくして。</li> </ul>
	④集団行動の制御	<ul style="list-style-type: none"> <li>ひとりひとりを全部見られるわけじゃないから、色々なことに目を向けて注意するっていうことが大変でした。</li> <li>2回目になってからは、結構積極的に、声かけみたいなのができるようになって。</li> </ul>

子どもとの関わり	⑤人や環境への馴化	<ul style="list-style-type: none"> <li>積極的に話しかけてくれたり、すぐ名前前で呼んでくれて、全然初めて関わる感じではなく、抵抗はなかった。</li> </ul>
	⑥印象の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初はやっぱり緊張したりとか自分を出せていないような子が多く見えたんですけど、友達もできたり、勝手を共有したりしながら笑顔が増えたのが一番変わったなと感じたところでした。</li> </ul>
	⑦保育技術の実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>運動して終わった後にハイタッチを求めたり、口数が少ない子たちにも平等に接した。最初は、恥ずかしがる子がいたりしたけど、みんなと仲良くなれるよう工夫した。</li> <li>プラスな言葉かけをしたり、できないって言った子どもにどうやればできるようになるとか。</li> </ul>
	⑧子どもの観察	<ul style="list-style-type: none"> <li>夜遅くまで起きてたって話を翌朝聞くこともあったんですけど、それでもスポーツの時にはすごい動いていたりして、子どもってすごいなあって感じました。</li> <li>スポーツ得意でも好き嫌いがあったり、スポーツは苦手だけれども一生懸命頑張っていたり、いろんな面が見られてよかったです。</li> </ul>
	⑨子どもへの指示	<ul style="list-style-type: none"> <li>遊ぶ時は遊んで、聞く時は聞く、休む時は休むって、メリハリがついていたなと感じました。低学年の子もいたし、中学年、高学年といましたが、結構指示が通りやすかったです。</li> </ul>
	⑩責任感の自覚	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの親もいない私たちがだけ預かるっていう体験が初めてだったから、責任感があって大勢を見るのは初めてだったんで、楽しかったけど、しっかり見ないとあって思いました。</li> </ul>
	⑪関わりに関する反省	<ul style="list-style-type: none"> <li>均等に関われたかって言われたら、ちょっと微妙なんですけど、自分から言っ、何か話したり、一緒にスポーツしたりすることはできたかなっていう感じ。なんかその、あんまりコミュニケーション取れなかったかな。</li> </ul>
	⑫コミュニケーションの技術の習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>好きなことから話を展開していくと子どもが好きな話だと食いついてくるから話をする時間が増えた。コミュニケーションが増えることに気がついた。</li> </ul>



## (2) 自己表現

守屋ら（2023）では、①自主的に質問、②子ども集団への指示、③コミュニケーションの深まり、④自己開示、⑤子どもへのアドバイス、⑥自己の成長、⑦責任感の芽生え、⑧業務と立場の理解、⑨モデリング行動の9の内容が語られた。

今回は、すべて前回と異なる内容が語られ、①関わり方の工夫を4名、②社会人的な態度を1名、③保育者としての視点を4名、④同僚とのコミュニケーションの必要性を3名、⑤子どもとの積極的関わりを2名、⑥自主的な提案を3名、⑦

表3 振り返り視点「自己表現」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語り
自己表現	①関わり方の工夫	・教えるのがあんまり得意じゃないんで、友達感覚で接した部分があります。
	②社会人的な態度	・コミュニケーションが不得意なのを見せて、運営の人に暗い表情やコミュニケーションが取れないということを知らせてしまうのは良くないと考えた。
	③保育者としての視点	・子どもと接するので、元気にパワフルに明るくいた方がいいな。運動する時はもちろん、子どもたちの面倒を見に行くときも笑顔を保って行動していた。
	④同僚とのコミュニケーションの必要性	・（仲間と）だんだん関係が築ければできるけど、初対面とかだと話すの苦手です。
	⑤子どもとの積極的関わり	・自分からそのコミュニケーション積極的に取りに行くこともできたので、特に意識することなく自然に接することができたという感じです。 ・休み時間があった時に一緒に鬼ごっこやったりっていうのを自主的にやってみました。
	⑥自主的な提案	・スタッフにも自己表現できました。自分から何か提案したりとかもありました。
	⑦自主的に動けなかった反省	・自分で考えて動けたら、ちょっとよかったかなって思いました。

自主的に動けなかった反省を1名が語っていた。

ボランティアに参加した学生は、子どもとの〈関わり方の工夫〉を考え、自分の考えを伝える努力をしていた。〈保育者としての視点〉を持って、自身の立場を理解しながら〈子どもとの積極的関わり〉を実践できていた。スタッフとの関わりの中では、〈社会人的な態度〉を持つことを意識しながら、〈自主的な提案〉をできる学生が見られた。一方で、今回の期間の中では〈自主的に動けなかった反省〉を抱く学生もいた。〈同僚とのコミュニケーションの必要性〉を感じており、互いに自分の意見を出し関係性を結ぶことが業務のためにも必要であるという理解が進んだと考えられる。

## (3) 勤務態度

守屋ら（2023）では、①業務の自覚と理解、②主体的な働き、③達成感、④時間管理の理解、⑤疲労の蓄積、⑥子どものための頑張り、⑦子どもへの関わり方の反省の7つの内容が語られた。

今回、前回と共通する内容として、①業務の自覚と理解を5名、②主体的な働きを1名、③達成感を4名が語りに含めていた。前回と異なる内容として、④勤務態度への自信を5名、⑤報連相の遂行を3名、⑥時間管理の理解と失敗を3名、⑦勤務態度への反省を3名、⑧苦手なことに対しての積極的な取り組みを1名が語っていた。

ボランティアに参加した多くの学生は、〈業務の自覚と理解〉をして臨んでいた。ボランティアを通して〈達成感〉を得て、〈勤務態度への自信〉を持つこともできた。具体的には〈報連相の遂行〉を行い、〈主体的な働き〉をできた学生もいた。〈時間管理の理解や失敗〉や〈勤務態度の反省〉について言及もあり、内省につながっており、〈苦手なことに対しての積極的な取り組み〉が見られ、勤務を通して成長しようとする姿があった。

## (4) チームワークの理解

守屋ら（2023）では、①関係性づくりのためのコミュニケーション、②リーダーへの敬意、③情

表4 振り返り視点「勤務態度」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語り
勤務態度	①業務の自覚と理解	• 大人のコーチが、自分たちのことも指示してくれるので、何やって何やってとか、こうしてって言われたのをすぐ動いたり、自分たちが足を引っ張らないようにはしました。
	②主体的な働き	• 言われたこともちゃんと出来、言われていないことも こういう時には自分は何をするべきか考えて行動できるようになりました。
	③達成感	• 動きもスムーズだと言われた。自分の中でこれができるようになった。他人から評価をもらえるのはありがたい。
	④勤務態度への自信	• 態度も、良くしていた。気遣いのできる人になりたいと思っていたので、その努力をしていた。
	⑤報連相の遂行	• スタッフの方に報告をしていました。怪我とか、やっぱりスポーツなので、大きな怪我もありますし。
	⑥時間管理の理解と失敗	• みんなで5分前行動、自分たちでちょっと早めにいこうみたいな感じでなって、友達と早めに行ったりしました。 • 6時半に起きようと言って目覚ましかけていたけど、5時半に起きたけど、また寝てしまった。
	⑦勤務態度への反省	• 2日目の午後ほとんど何もしてなかったんです。だから、もうちょっと動けばよかったかなと思いました。 • 寝坊して申し訳ない気持ちでいっぱい。コーチに対してもそうだし、一緒にいた女子にも申し訳ない気持ち。
	⑧苦手なことに対しての積極的な取り組み	• 逃走中のハンターに選ばれてしまって、すごく嫌だったんですけど、もう後戻りはできないと思って全力でやりました。それも含めて、自分なりにしっかりと頑張れたと思います。

表5 振り返り視点「チームワークの理解」における学生の言及のまとめ

振り返りの視点	コード	学生の語り
チームワークの理解	①関係性づくりのためのコミュニケーション	• コミュニケーションをもう少しとった方がよかった。会話、一緒に行動をすることがチームワークを高めるのに必要だと感じた。
	②リーダーへの敬意	• 私コーチとふたりで組んでたんで、そこはもうバッチリでした。
	③ボランティアメンバーへの心配	• 私以外の2人が来ない時があって、大丈夫かなと思った時がありました。
	④自主的な役割の判断	• 「3人で話し合っ」てという感じで伝えられていたので、自分たちで考えて判断するという感じ
	⑤ボランティアメンバーでの話し合いと連携の実践	• その時々で話し合っ、効率よく回せた。 • 3人でこういうふうにしようとか、話し合ったりして上手く回せていたのでチームワークは良かった
	⑥報連相の実践	• ホウレンソウは大事にしている。具合悪い場合はすぐに相談している。
	⑦チームとしての意識	• 競技とかするので、チームの中の誰かが活躍したら 声援をあげたり、友達にも なんかさっき同じチームの〇〇君すごかったよねとかなんか高め合っっていく感じ。
	⑧子どもを理解したチーム作り	• この子をちゃんと分かってあげることで、みんなで協力できた
	⑨チームからの学び	• この人にはこういう考え方があるんだな。自分とは違う視点からの考えがあることの学び。

報共有の実践、④報連相の重要性理解、⑤役割の分担、⑥問題への気づきの6つの内容が語られた。

今回は、前回と共通する内容として、①関係性づくりのためのコミュニケーションは2名、②リーダーへの敬意は3名が語りを含めていた。前回と異なる内容として、③ボランティアメンバーへ

の心配は2名、④自主的な役割の判断は8名、⑤ボランティアメンバーでの話し合いと連携の実践は5名、⑥報連相の実践は5名、⑦チームとしての意識は3名、⑧子どもを理解したチーム作りは3名、⑨チームからの学びは1名が語っていた。

ボランティア参加した学生は、子どもとの活動をする上で、子どもと〈チームとしての意識〉を持ち、〈子どもを理解したチーム作り〉も考えるようになっていった。活動を進める際には〈報連相の実践〉や〈ボランティアメンバーでの話し合いと連携の実践〉、〈自主的な役割の判断〉が自然と行われていた。その中で〈ボランティアメンバーへの心配〉も語られ、チームとして能力を発揮することの難しさを感じられたようだった。スタッフのチームワークの良さを目の当たりにし、〈リーダーへの敬意〉を持ち、学ぶ意識を持っていたことが分かる。〈関係性づくりのためのコミュニケーション〉を図ることによって、異なるメンバーによって構成されている〈チームからの学び〉につながるという理解につながった。

### 3.2 保育への活用

インタビューにおいて、「保育に活かすことができるか」と質問を行った。その結果、①子どもの注目を集める技術を2名、②子どもの心理を理解した対応を6名、③先を見据えた行動や配慮を5名、④声掛けの工夫と実践を9名、⑤子どもの個性や発達の理解を2名、⑥スポーツの理解を1名、⑦体力の向上を2名、⑧将来の視野の広がりや2名、⑨子どもとの関わりのうれしさを2名、⑩自身の意欲・能力向上への意識を4名、⑪安全への配慮を1名、⑫同僚とのコミュニケーションの取り方を1名が言及した。

保育場面への活用が具体的に意識されていた。基本的な考え方や実践的な子どもへの対応の方法について理解が深まっていた。実際に子どもとの関わりとチームとして体験できたことが、学生の自信や意欲につながったと推測できる。

### 3.3 社会人基礎力

1名の欠損値があり、11名を対象に分析をした。

表6 保育への活用における学生の言及のまとめ

コード	
①子どもの注目を集める技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>子ども達の注目集めたい時はどういうふうにしたらいいか考える機会になった。</li> <li>注目を今回集めるのが結構大変だった部分があった。みんなの話とかまとまらないみたい。小さい子だと、そういう大変だと思うので、今回そういう活動を行ってみて、大変さというか、まあ、コツじゃないですけど、そんなの分かった感じがしました。</li> </ul>
②子どもの心理を理解した対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>一方的に指示をするのではなくて、お互いに気持ち悪くならないように心がけました。</li> <li>気持ちの汲み取り方とか、今この子はこう思ってるなあとかは少しはわかった気がしました。</li> </ul>
③先を見据えた行動や配慮	<ul style="list-style-type: none"> <li>結構いろんなところに注意したりしないといけないけど結構大変なんだなって実感できて、いい体験だったなあって思います。</li> </ul>
④声掛けの工夫と実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手のここに投げるんだよっていう意味の声かけをしたりとか、指導する機会を見られた。</li> <li>提案をするような声掛けをすることで、フェンシングとかで「こういう突きかたをすると良さそうじゃない」というように声をかけて、実際にやってみると「確かに」みたいな感じで一緒に喜びました。</li> </ul>
⑤子どもの個性や発達の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>やっぱり個性の違いとかは明確に分かった。そこは保育にいかせると思っています。</li> <li>子どもたちの関わりについては年齢にも幅があって、小学生として一括りではなくて、年齢ごとにできることが変わるところが勉強になった。</li> </ul>
⑥スポーツの理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>フェンシングとか普段できないような運動に触れられた。</li> </ul>
⑦体力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>本当に運動だったんで、運動体力の面でいかせる。やっぱり子どもたちは元気だなと思いました。</li> </ul>
⑧将来の視野の広がり	<ul style="list-style-type: none"> <li>私スポーツが好きだから、スポーツを生かした仕事をしたいと思って、子どもたちでも関わりたいし。私の明るさとかも生かしたかった。</li> </ul>
⑨子どもとの関わりのうれしさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちと一緒にスポーツしてる時とか以外でもお昼食べてるときとかも一緒にいっぱいお話もできて、いっぱい笑顔が見れるのがよかった。</li> </ul>

<p>⑩自身の意欲・能力向上への意識</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• スタッフの方が自分の子どもを預けても任せられちゃうなみたいに言うてくださって、それが嬉しかった。だからもう1回行って、もっと磨きたいと思いました。</li> <li>• 周りが見れるようになった。アルバイトでも自分の目の前のことしか見えていないけど、子どもの視点、スタッフの視点を自分で見てきて、全体を見回して、次にやる行動を準備できるように、見通しを持って行動することができるようになった。先を見据えて行動できるようになった。</li> </ul>
<p>⑪安全への配慮</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 子ども達を見てないっていう間を作らないということです。保育園の実習体験のとき、子どもたちに背を向けていた時間が少しあったかな。子どもを見ていない時間があると、その間に怪我してしまったりしてしまうので。</li> </ul>
<p>⑫同僚とのコミュニケーションの取り方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• コーチ陣と関われたことによって、年齢が違う人と同じ仕事をするというところで、こういう風に話したらいいとか、年上の同僚とのコミュニケーションの取り方などは今後役に立つ。</li> </ul>

図1に領域ごとの事前と事後の平均得点を示した。事前では平均値が10点を超える領域はなかったが、事後では、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「状況把握力」、「規律性」の5つの要素で10点を超えた。

領域ごとの事前事後の得点変化について分析を行うために、対応のあるt検定を行った。表7に示した通り、すべての要素において有意に事前より事後において社会人基礎力の得点が上がったことが明らかとなった。ボランティア活動を通して、全体的に社会人基礎力が向上していると示唆される。得点を見ると、とくに向上したのが、「働きかけ力」「実行力」の要素であった。人との関係を調整し、物事に挑戦する力がボランティア前に比べ成長していることがうかがえる。短期間での上昇が見られたということは、活動を通して、さまざまな側面での自己肯定感が高まり、社会に出て人と関わることへの自信を持つようになったとも考えられる。

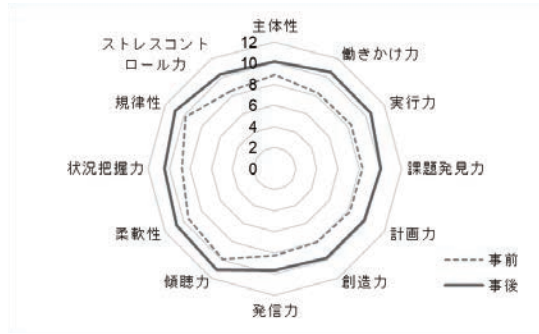


図1 社会人基礎力の要素ごとの平均点（事前と事後）

表7 社会人基礎力の領域ごとの得点変化とT検定の結果

	事前事後の得点変化		対応のあるT検定		
	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
主体性	1.5	1.81	2.67	10	.02
働きかけ力	2.5	1.37	5.95	10	.00
実行力	2.5	1.44	5.65	10	.00
課題発見力	2.0	1.48	4.47	10	.00
計画力	1.7	1.56	3.68	10	.00
創造力	1.9	1.64	3.86	10	.00
発信力	1.5	1.44	3.35	10	.01
傾聴力	1.4	1.29	3.52	10	.01
柔軟性	1.5	1.44	3.35	10	.01
状況把握力	1.8	1.83	3.29	10	.01
規律性	1.2	1.33	2.95	10	.01
ストレスコントロール力	1.7	1.79	3.19	10	.01

#### 4. 考察

まず、学生からの語りについて、前回（守屋ら、2023）の結果と合わせて考察を行う。

子どもとの関わりについて、「子ども理解」、「子ども同士の関わり」「介入方法の模索」、「集団行動の制御」が前回の調査とも共通して、多く語られた。子どもと直接関わるボランティア活動を



通して、子どもについての実際的な理解が深まったと推測される。また関わりを通して試行錯誤をし、うまくいかない葛藤を感じたという点も特徴である。

自己表現について、「関わり方の工夫」、「保育者としての視点」、「同僚とのコミュニケーションの必要性」が、今回初めて見出された内容として多く語られた。保育者としての意識をもった学生が参加者の中に多かったと考えられ、自分の能力に合わせて工夫したり、保育者の立場として何が必要であるかを判断できたりできていた点は、今回のようなスポーツボランティアの有益性を示すものである。自分を表現するにあたり、相手とのコミュニケーションが必要となることの気づきもあり、その難しさを感じる学生もいたが、今後伸ばすべき側面として自覚されたとと言える。

勤務態度については、「業務の自覚と理解」、「主体的な働き」「達成感」が前回の調査とも共通して、多く語られた。スポーツボランティアの中で何が求められているかを理解し、役割を判断しながらボランティアに従事できていた様子が見える。その中で達成感が得られたという点は、学生自身の自己肯定感を育み、向上心を高めることに寄与するだろうと推測する。また前回に引き続いて参加した学生も2名おり、今回の調査において「勤務態度への自信」が多く語られたことも特徴であった。自信を持って活動に参加することが、次への挑戦にもつながり、学生の育ちに良い影響を与えると考える。

チームワークの理解については、「関係性づくりのためのコミュニケーション」「リーダーへの敬意」を前回と共通して語られた。「自主的な役割の判断」、「ボランティアメンバーでの話し合いと連携の実践」、「報連相の実践」が今回初めて見出された内容として多く語られた。参加者の積極性が発揮され、自主的な行動が、ボランティアの場面においても実践できていた。その自主的な行動がチームとしての働きにつながるという理解がされていたと考える。また、スポーツという特性から、子どもとのチーム作りも意識されていたことが語りから明らかとなった。これは、子どもを

主体として考えるという保育に関する大学での学びが活かされている面である。

以上のように、子どもとの関わり、自己表現、勤務態度、チームワークの理解についての学生の自己評価の語りから、スポーツボランティアを自身の経験として有益なものとして受け止め、経験を活かそうとする意識をもってたと示唆される。

「今回のボランティアを保育に活かすことができるか」という質問に対しても、上記から理解された通り、保育に活かすことができる貴重な経験であったという語りが見られた。「子どもの心理を理解した対応」「先を見据えた行動や配慮」、「声掛けの工夫と実践」についての語りが多く、具体的な子どもの姿を理解しながら、子どもに合わせて関わるという、保育の根本となる考え方を実践できた点を、有益な経験であったと捉えられたようである。子どもとの関わりをチームとして経験できたことが、チームで保育を行うということにも活かされると考える。

次に、社会人基礎力についての結果を考察する。先行研究では、山下・行實(2016)は、スポーツボランティアを通して、「社会人基礎力」のうち、参加者の「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「状況把握力」、「規律性」の8要素において有意な向上が見られたことを報告した。また、音成(2016)は、参加者の「主体性」、「働きかけ力」、「発信力」、「傾聴力」、「状況把握力」の5要素において有意な差が見られたことを報告した。一方、今回の結果は、12の要素すべてにおいての有意な向上が認められ、スポーツボランティアの参加が社会人基礎力を高める有益な活動であることが示唆された。

中でも、「働きかけ力」「実行力」の要素の向上が際立っていた。「働きかけ力」は、他者に対して、場面や状況を意識した発言ができており、内容が含まれており、相手に配慮したコミュニケーションの力だと捉えることができる。「実行力」は困難な状況であっても目標を持って取り組むという内容が含まれている。これらは、ボラ

ンティア前には低い数値であり、学生の苦手な要素であったと推測される。しかし、ボランティア活動を通して、実践しなければならない場に身を置くことによって、実際にできたという自信をつけ、自己評価が高まったのではないかと推測する。短期間での能力の向上が見られるという点からも、チームでの活動が多いスポーツボランティアの経験によって、学生のもともと持っていた実践力を引き出したのだと考えられるだろう。

音成 (2021) が指摘するように、保育者養成校に所属する学生は保育者となる自己意識・職能意識の形成とともに、保育者としてのパフォーマンスの向上も図らなければならない。今回の「働きかけ力」や「実行力」が向上したという結果は、パフォーマンスの向上とも重なっていると示唆される。学生の語りからも、子どもについて具体的に理解し、試行錯誤しながら関わることができた姿がうかがえた。保育において最も重要である、子どもと関わる力が向上したと考えることができる。

以上より、スポーツボランティアの経験を通して、「社会人基礎力」と「保育実践力」が向上したことが示唆された。子どものスポーツに関わるボランティアという特性から、保育者養成課程に所属する学生にとって有益な経験となったと考える。今後、これらの力の向上が他の場面でどのように生きてくるのか、継続的に理解することも重要であると考えられる。

#### 参考文献

藤田紀昭 (2015) : 知的障害者スポーツ大会へのボランテ

- ィア参加による障害者に対する意識変化に関する研究. 同志社スポーツ健康科学, 7, 9-16.
- 川喜田二郎 (1970) : 続・発想法 KJ 法の展開と応用, 中公新書.
- 守屋志保・蛭原正貴・大塚紫乃・村上涼 (2023) : 保育者養成課程の大学生によるスポーツボランティア経験の意味づけ—社会人基礎力と保育実践力の向上への寄与—, 江戸川大学紀要 (33), 323-334.
- 元嶋菜美香・宮良俊行・熊谷賢哉・金相勲・田井健太郎 (2016) : スポーツボランティア活動が体育会系部活動所属学生の気分状態に与える心理的影響: ボランティアスタッフの満足感に着目して. 長崎国際大学論叢, 16, 13-22.
- 中村真緒 (2023) : 保育者養成校における地域連携活動・地域ボランティア実践の教育的効果. ユマニテク短期大学紀要, (6), 21-32.
- 音成陽子 (2016) : ボランティア活動が学生に与える影響: 自尊感情と社会人基礎力. 流通科学研究, 16 (1), 39-46.
- 音成陽子 (2017) : 大学生のスポーツ・ボランティアのあり方. 流通科学研究, 17 (1), 25-38.
- 音成陽子 (2021) : 保育系学科の短期大学生におけるスポーツボランティアの認識と参加意欲. 流通科学研究, 21 (1), 1-8.
- 新谷龍太郎 (2017) : 保育職志望学生におけるボランティア体験の意義. 保育研究 (47), 34-43.
- 多田琴子・高松邦彦 (2019) : 保育職を目指す学生の継続的ボランティア体験と職能形成.
- 武隈晃 (1996) : 「スポーツボランティア」概念の周辺. 鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編, 48, 57-70.
- 豊田則成・金森雅夫 (2007) : スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは? びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 (4), 9-18.
- 山田力也 (2007) : 障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究. 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要, 37 (11), 8.
- 山下博武・行實鉄平 (2015) : 徳島ヴォルティスにおける運営ボランティア参加学生の意識変容プロセス. 体育・スポーツ経営学研究 (28), 33-51.
- 山下博武・行實鉄平 (2016) : 大学と J クラブの連携によるスポーツボランティア活動の評価: 社会人基礎力に着目して. 体育・スポーツ経営学研究 (29), 33-48.

### 資料：「社会人基礎力」の尺度

- 「社会人基礎力」は12能力要素を測定する各3項目、合計36項目からなる尺度である。各項目に対して、「4.非常にそう思う」、「3.そう思う」、「2.あまりそう思わない」、「1.まったくそう思わない」の4段階の評定を用いた。
- 質問は以下の通りである。

次の項目について、自身がどれだけ当てはまると思うか、番号を選択してください。

#### 前に踏み出す力

##### 【主体性】

1. 自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる
2. 自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持ってとりくむことができる
3. 自分なりに判断し、他のグループメンバーに流されずに行動できている

##### 【働きかけ力】

4. グループメンバー間で協力する必要性を伝える（説明する）ことができる
5. 状況に応じた言葉かけを意識してグループメンバーの参加を促す発言ができている
6. グループ内の沈黙、軋轢、混乱を解消する発言ができている

##### 【実行力】

7. 小さな成果に喜びを感じ目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる
8. 失敗を恐れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる
9. 強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる

##### 考え抜く力

##### 【課題発見力】

10. 企画のイメージを明確にし、その実現の為に現段階でなすべきことを把握できている
11. 現状（自分たちの準備状況）を正しく認識するための情報収集や分析ができている
12. 企画に対する課題（問題）を明確にするために、他者の意見を積極的に求めている

##### 【計画力】

13. 作業プロセスを明確にし、優先順位をつけた現実性の高い計画を立案できている
14. 常に計画と進捗状況の違いに留意することができる
15. 進捗状況や不測の事態に合わせて柔軟に計画を修正できている

##### 【創造力】

16. 複数のものを組み合わせる新しいものを作り出すことができる
17. 従来の常識や発想を転換し、新しいものをつくりだすことができる
18. 成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している

##### チームで働く力

##### 【発信力】

19. 事例や客観的なデータ等を用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる
20. 聞き手がどのような情報を求めているのかを理解して伝えることができる
21. 話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている

##### 【傾聴力】

22. 内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる
23. 相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる
24. 相手の話を素直に聞くことができる

##### 【柔軟性】

25. 自分の意見を持ちながら他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる
26. 相手がなぜそのような考えるのかを相手の気持ちになって理解することができる
27. 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる

##### 【状況把握力】

28. 周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる
29. 自分にできること、他人ができることを的確に判断して行動することができる
30. 周囲の人の状況に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができる

##### 【規律性】

31. 相手に迷惑をかけないように、最低限守るべきルールや約束マナーを理解できている
32. 相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる
33. 規律や礼儀が特に求められる場面では粗相のないように正しくふるまうことができる

##### 【ストレスコントロール力】

34. ストレスの原因を見つけた場合、自ら又は他人の力を借りて取り除くことができる
35. 他人に相談したり別のことに取り組んだりして、ストレスを一時的に緩和できている
36. ストレスを感じることは一過性又は当然のことと考え重く受け止めないようにできている

